

新刊紹介

寒川恒夫編著

『近代日本を創った身体』

四六判／262頁／定価2100円＋税／大修館書店，2017年

中塘 二三生

元関西学院大学人間福祉学部教授

本書は、東京大学大学院教育学研究科の「スポーツ人類学」の授業での討論をきっかけにして編纂されたものであり、冒頭において以下のように新刊の趣旨が述べられている。すなわち、『明治という時代は、変化の大きさから眺めた時、他の時代を圧倒している。いつの時代も変化がある。そして変化は、外から新しい文化がもたらされるのがきっかけである場合が多い。……中略……』

外来文化は、セットになっていちどきに日本にもたらされたものでなく、相前後して伝わり、長い時間をかけてゆっくりと日本列島に広まり、ゆるやかに日本人を創っていったものであった。ところが、明治時代は違っている。欧米の近代文化が、まるごと意図的に、それも国策として明治政府の下に一元化されて導入され、ごく短期間に国民を広く深く変えることが目論まれた。それまでの日本人とはまるで別人の近代人を創るためであった。その背景にあったのは、同時代の中国が経験していた欧米列強による植民地化への恐怖であった。この恐れという動機は、国と人を挙げて日本は変わるべきであり、近代化されねばならないという至上命令を発する。徴兵制や帝国憲法、平民平等、義務教育、資本主義経済、鉄道、洋装、肉食など、文化と日常生活のおよそすべての面において近代化は推進されたが、「からだ」も例外でなかった。それまでの「からだ」を脱却して、近

代社会に固有な「からだ」をもつことが要請されたのである。近代社会は、これを動かすのに、特別の「からだ」を必要とするのだ。もちろん、ここでいう「からだ」とは心身を孕んだ身体の意味である。身体の動かし方から、身体についての考え方まで、ともかく近代社会は「近代のからだ」によって動いている。近代社会には、近代にふさわしい「からだ」があるのだ。こうした「からだ」は「強いからだ」、それは当時列強が中国に投げかけた「東亜病夫」を反面教師とすべく望まれた「植民地主義的マスキュリニティーのからだ」でもあった。こうした展望の下に本書は、日本人が初めて経験する「近代のからだ」を再構成しようとしている。日本人は「近代にふさわしい身体」をどのように創っていったのか、問いたいのである』と著している。また、本書の考察には、『国際比較の中で発見された日本人の「劣った身体」や近代社会が否定する「はだか」から、臣民に求められた身体、国家をリードする官僚の卵である帝国大学生に求められた身体、近代企業が期待する身体、さらには、人を国の人的資源とみて、休むことさえ管理する「リ・クリエイトされる身体」まで及んでいる』こと、などを対象としている。

本書は、第一章から第八章までに『今日の我々も共有する近代日本人の身体を浮き彫りにすること』をめざして構成・編纂されている。各章の末

尾には注約が設けられ、授業で討議されたのに相応しく用語の説明や出典が詳細に附記されており、スポーツ人類学等の研究・教育の参考となるように思われる。以下に、各章題と細目を記した。なお、各章題前には著者名を附した。

第一章 寒川恒夫：『江戸の身体から明治の身体へ — 嘉納治五郎の柔道にみる近代の身体』の章では、一) 嘉納治五郎が創り上げた柔道に期待された身体、二) 三育主義教育と柔道、三) 物理学と心法の項、四) おわりの項として—エスノサイエンス身体論からサイエンス身体論へ—の面から執筆している。

第二章 中澤篤史：『大学が期待した学生の身体 — 学生スポーツ団体をめぐるやり取りの分析を通して—副題に「学生スポーツ団体をめぐるやり取りの分析を通して』の章では、一) なぜ東京帝国大学は学生スポーツ団体を支援したのか、二) 東京帝国大学運動会の歴史、三) 大学が抱えた問題と大学が期待した学生の身体、四) 大学が学生に期待した〈健康で健全な身体〉、の面から執筆されている。

第三章 出町一郎：『“劣った身体”の発見』では、一) 東京大学医学部の歴史 — 日本初の大学医学部の誕生—、二) “日本人のからだ” = “劣った身体”の発見、三) おわりに — 日本近代化のはじまりは身体近代化のはじまりか—、の面から執筆されている。

第四章 澤井和彦：『“蛮カラ”な運動部員の思想と身体』では、一) スポーツにおける先駆者としての旧制高校と帝国大学、二) 旧制高校と帝国大学における学生文化の変遷と運動部員、三) 旧制高校とパブリック・スクール、四) “蛮カラ”運動部員の変容 — スポーツ資源の供給者から消費者へ—、五) おわりに — “蛮カラ”から“体育会系”へ—、の面から執筆

されている。

第五章 新雅史：『レクリエイトされる身体 — 自律化するスポーツ空間／グローバル化するレクリエーション—』では、一) 「スポーツ空間」成立前史としての公園設置運動、二) 「自然的体育」から「人工的体育」へ、三) YMCA のレクリエーション、四) レクリエーションのグローバル化とスポーツ、五) オリンピックと国家的レクリエーションのグローバル化、六) おわりに — レクリエーション活動によるスポーツ空間の拡大と課題—、の面から執筆されている。

第六章 東原文郎：『“体育会系”神話の起源 — 近代企業が求めた有用な身体—』では、一) 戦間期スポーツマンに対する実業界の評価、二) “体育会系”神話の胎動 — 大正初期の就職環境—、三) “体育会系”の可視化と「体育熱」の高騰 — 大正中期の就職環境—、四) “体育会系”神話の確立 — 大正末期／昭和初期の就職環境—、五) “体育会系”神話の洗練 — 昭和初期以降の就職環境—、六) “体育会系”の身体と“教養系”の身体、の面から執筆されている。

第七章 竹田直也：『近代日本が否定した「身体」』では、一) 近代日本が否定した身体—「裸体」、二) 「裸体」否定はいかにして全国に伝播したか — 学校と新聞が果たした役割—、三) 「裸体」否定理由の変化 — 日露戦争と「裸体」—、四) おわりに — 「裸体」習俗の変容とさらなる課題—、の面から執筆されている。

第八章 七木田文彦：『経験と切り離された身体の行方 — 健康をめぐる近代的身体の一断面—』では、一) 経験と分断された健康の知、二) 健康教育運動の興隆、三) 戦時下の学校衛生改革 — 連繫、合理化、科学化、総合化の追求—、四) 健康

の内面化と習慣・態度の訓練, 五)「健康教育」のその後 —合理的な自己コントロールの浸透と抵抗—, の面から執筆されている.

末尾に, 紹介者の熟読不足によって, 本編著者の意図とは異なる新刊紹介になった可能性は否め

ない. 本新刊の他に「教養としてのスポーツ人類学」, 「相撲の人類学」, 「21世紀の伝統スポーツ」などの編書や監修(大修館書店)がなされており, スポーツ人類学等の教育・研究用資料として利用できよう.